

夜の河を渡れ

梁石日

梁石日

夜の
河を
渡れ

江苏工业学院图书馆
藏书章

筑摩書房

著者紹介

梁石日（ヤン・ソギル）

1936年、大阪市に生まれる。10代より、金時鐘らと詩の活動を始める。29歳のとき事業に失敗、莫大な負債をかかえる。各地を放浪、さまざまな職を経て、タクシードライバーを10年つとめる。著者は詩集『夢魔の彼方へ』（梨花書房）『タクシー狂躁曲』『タクシードライバー日誌』（ともに「ちくま文庫」）『族譜の果て』（立風書房）『ドライバー最後の叛乱』（情報センター出版局）『アジア的身体』（青峰社）など。

装画	中村小太郎	厚徳社印刷 積信堂	振替 東京九一四一二三	電話 東京（五六八七）二六八〇（営業） 東京（五六八七）二六七〇（編集）	東京都台東区蔵前二一六―四	発行所 筑摩書房	発行者 関根栄郷	著者 梁石日	一九九〇年十一月二十日 初版第一刷	夜の河を渡れ

© YAN SOK IL 1990

Printed in Japan

ISBN4-480-80298-3

乱丁・落丁本の場合は、ご面倒ですが小社読者係あてに御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

夜の河を渡れ

カーテンを閉めきった暗闇の部屋は、昼なのか夜なのかよくわからなかった。李哲博は二日酔いの頭の中で、（いま何時頃だろう……）と思った。たぶん午後の三時頃にちがいないと思いがら、重い頭をもたげてテレビのデジタル時計を見ると、暗闇の中に午後三時十分を表示している数字が、青く光っていた。歌舞伎町で飲み歩き、友人の朴政道と別れたのは、午前四時頃である。十時間以上眠っているのに、二日酔いのけだるい感じが抜けきっていない。間もなく女たちが集ってくる時間だった。哲博は深呼吸をして背筋をのばし、はずみをつけてベッドの上に跳ね起きて、カーテンと窓を開けた。十月のすがすがしい光と風が部屋に広がり、街の騒音が活気を伝えていた。マンションの前の明治通りは一寸刻みの渋滞である。新宿職安通りを挟んで真向いにあった古い喫茶店と三軒の住宅は跡形もなく撤去され、ビル建設の基礎を

打ち込むハンマーの音が地響きをたてている。哲博はもう一度腕をのばして深呼吸をした。そして冷蔵庫から牛乳を取り出し、半分ほど残っていた量を、そのまま飲み干した。冷たい牛乳は渴いた喉をうるおし、二日酔いの胃袋にしみわたり、精気が蘇^{よみがえ}ってきた。

彼は体の向きをゆっくり変えて、壁にかかっている等身大の鏡と向き合った。高校時代にボクシングで鍛えた筋肉が美しい線を描いている。彼は鏡に映っている自分の姿をじっと見つめていたが、おもむろに拳^{こぶし}を固め、腹筋に力を集中させて身構え、鏡の中の自分と対峙した。左の肩を少し落とし、顎のあたりを防御した右腕をひきつけ、頭を左右に軽くゆすりながら一点にしぼった視線をまばたきもせずに、変化する相手の眼を凝視した。どのような角度から攻撃されても視線をそらさず、左と右の脚に移動する体の重心を爪先で支え、そりかえった上半身のバランスを整えて隙を与えてはならないのだ。相手が攻撃を仕掛けてきたとき、そこに一瞬の隙ができる。攻撃と防御は瞬間の反射神経できまる。隙のない相手は、その隙のない構えの中に隙がある。相手の呼吸を感じとり、至近距離を計って飛び込む。そして相手の顔面をとらえた拳を瞬間的にひねるのだ。肉体に喰い込んだ拳をひねることによって、破壊力は内臓にまで達する。勝負をきめるのは速度である。相手より速度が速ければ、こちらの顔面をとらえる紙一重の差で、その前に相手は倒れる。

しばらくの間、哲博は鏡の中の幻の敵と向き合っていたが、今度はバーベルを持ち出して筋力トレーニングをはじめた。高校を卒業してから、七年になるが、体調を崩したとき以外、ト

レーニングを欠かしたことがない。仰向けになって天井の一角を見すえ、呼吸に合わせてバーベルを持ち上げては下ろし、疲れるといったん休息してまたくり返す。みるみる露玉のような汗がふき出し、筋肉の上ではじける。このトレーニングは肉体と集中力と瞬発力を鍛えるのに最適だった。トレーニングを終えたあと、哲博は体の中に自信が満ちてくるのを感じた。自信を持つこと、相手が誰であろうと、またどのような状況であろうと、おじ氣づいたり、ひるんだりせずに果敢に挑戦していくことが、いまの彼の生き方には必要であった。おじ氣づいたり、ひるんだりしたとき、そこから敗北がはじまるのだ。

約一時間ほどのトレーニングを終えた哲博は、シャワーを浴びて汗を流した。二日酔いのけだるい感じは汗とともに発散して、爽快な気分につつまれていた。そして腰にバスタオルを巻き、ソファに座って煙草を一服ふかしているところへ、アケミとキクがやってきた。

「トレーニングは終ったの」

とアケミがガムを噛みながら言った。

「まあな」

アケミの奇抜なパンクルックの絵柄に目を奪われて、哲博がなま返事をした。

「でもよく続くよ。感心しちゃう。あたしなんかさ、ダイエットしようと思ってエアロビクスへ通ったりするけど、一週間と続かないわね」

少し肥満気味のアケミがコーヒーを沸かしながら、しきりに尻を掻いている。

「どうしてそんなに尻を搔くんだ」

と哲博が言った。

「ケイに噛みつかれたのよ。ケイがへべれけになってき、泣いたりわめいたりした揚句、あたしのお尻に噛みついたの。変な癖があるよ、あいつは。つき合いきれないよ。男に振られたからって、いちいち泣かれたりわめかれたりしてき、おまけに、お尻を噛まれたんじゃたまないわよ。だから夕べはあまり寝てないんだ。ケイは惚れっばいから駄目なんだよな。商売でつき合った男に惚れちゃうんだもの、結果はわかりきってるじゃん」

アケミが愚痴るのも無理はなかった。ケイの失恋はいまにはじまったことではない。つい三ヶ月前にも、女友達の亭主との関係が発覚して、このマンションのこの部屋で髪の毛をむしり合い、ついには刃傷沙汰の大喧嘩をやったばかりだった。根はやさしい思いやりのある女だが、自分のものと他人のものとの区別がつかないのだ。気に入ったものがあると借金をしてでも買うし、人が望めば何でもくれてやる気前のよさが、かえって馬鹿にされるのだった。

「また振られたのか。今度はどんな男だ」

なにかにつけてサボタージュするケイの性癖に、哲博も手を焼いていた。注意すると、ふてくされて二、三日休んでしまうし、本気で怒ると、目に涙を一杯溜めてだんまりをきめこんでしまう。

「知らないよ、誰だか。あいつは病氣だよ。もっと自分を大事にすればいいのに、しょうこり

もなく同じことを何回もくり返すんだから」

アケミが腹立たしく言う。

「でも……」

いままで黙っていたキクが言った。

「ケイの気持はわかるような気がする。寂しいのよ」

「誰だって寂しいわよ。あたしだって寂しいよ。頼れる男が欲しいよ。好きな男の腕の中で泣いてみたいよ。でも、そんな男がどこにいるのさ。キクだってそうだろう。好きな男が欲しいと思ってるだろう。でも、みんな我慢してんだよ。そうじゃないの」

陽気だが、気の強いアケミの態度が陰悪になってきたので、

「もう、ケイの話はやめろ」

と哲博が幕を下ろした。

哲博は男と女の生臭い話は極力避けることにしている。割り切っているはずの男女関係の話になると、哲博の立場が微妙になり、仕事に差し障りがあるからだった。

「さあ、仕事だ。ケイは今日もさぼりか。しょうがねえな。トモコとルリが遅いじゃないか」

哲博はアケミがつくってくれたコーヒーを一口飲んで、服を着替えるためバスルームに入ろうとしたとき、電話のベルが鳴った。三、四回ベルが鳴るのを待って、哲博は慎重に受話器を取った。

「はい、ドリームですが」

と用心深い声で耳を澄ました。

「はい、そうです……わたしのところはみんな若い子がそろっています……はい、二十歳くらいの痩せた女の子ですか……わかりました。お値段は九十分で三万円です……はい、ホテル代は別です。お客さまのお名前は……栗原さんですか。いまだこちらにおられますか……高田馬場ですか、わかりました。それでは新宿のどこかのホテルに入って下さい。そこからもう一度、お電話をくれませんか。そのときホテルの部屋の番号を言って下さい……それでは」

電話を切った哲博がキクの顔を見た。客の注文にぴったしだった。

「どうして男は痩せた女がいいんだろう」

アケミがひがみっぽく言った。

「人それぞれだよ。おまえだつて結構もてるじゃないか」

哲博がアケミの機嫌をとるように言う。この商売をやってみて、女同士の競争心が相当きびしいことを知った。容姿に対する女の嫉妬心は、男の理解をはるかに越えている。髪の毛や指先にいたるまで嫉妬心の対象になるのだった。キクが銀色のマニキュアを塗つてくると、アケミは黒のマニキュアを塗ってきた。トモコがブランドものを身につけてくると、みんなもブランドものを身につけ、ケイは借金をして百五十万円もするローレックスの腕時計をはめて、これ見よがしに得意がつっていた。二十歳そこの娘が百五十万円ものローレックスをはめている

のは不自然すぎる。服装も派手になり、化粧もけばけばしくなって、誰が見ても普通の女には見えなかった。彼女たちの虚栄心はエスカレートするばかりだった。見かねた哲博が店の規則を作り、派手な服装をしないこと、厚化粧をしないこと、ブランドものを身につけないこと、要するに人目につかないようにすることをきめたのである。どこに警察の眼が光っているかわからないからだ。派手な恰好は警察に特定されるおそれがある。

「女子大生かOLのような恰好をしろ」
と哲博が注意した。

「そういうけどさ、近ごろの女子大生やOLは、水商売の女と見分けがつかないよ。自分のお金で好きなことしたっていいじゃんか」

ケイが反発した。

「おまえたちが金をどう使おうと勝手だけど、警察に睨まれたらどうするんだ」

「どうせ体を張ってヤバイことやってるんだからさ、いつかは警察のお世話になることくらい覚悟してるよ」

投げやりなケイの態度に哲博が一喝した。

「バカ！ だから用心しろと言ってるんだ。それがわかんねえのか。おまえは本当にバカだな」

哲博に叱責されたケイが目には涙を浮かべて、

「マスターは、どうしてわたしばかりしいじめるの」
と泣き出す。

「そうじゃねえんだ。おれはおまえが可愛いから言ってるんだ」

すぐに泣き出すケイを、哲博はティッシュで鼻をかませ、子供をあやすように抱きよせる。こうして彼女たちはできるだけ人目につかない服装をするようになったが、アケミだけは相変らず奇抜な恰好をしてくる。しかし彼女の奇抜な恰好は、ロックミュージシャンを気取った無邪気なものであったので、哲博もあまり干渉しないことにしていた。

三十分後、ホテルに入った男から電話が掛かってきた。

「ホテル水仙の三〇八号室だ。気をつけてな」

ホテル水仙は、このマンションから歩いて五分のところだった。哲博はキクを気づかいながら送り出した。見知らぬ男と密室で性行為をいとなむことには、危険がともなう。中には変質者がいないとも限らない。彼女たちの話を聞くと、変態に近い男はいくらでもいるとのことだった。哲博は彼女たちに防犯ベルを持たせているが、それでも安全とはいえない。男の力の前に女は無力だからである。哲博が彼女たちに高価なブランドものや現金を持たせない理由の一つには、金目のものを狙われないようにするためもあった。

キクとすれちがいに、トモコとルリが出勤してきた。

「遅いじゃないか。おまえたちがいないときに、客から電話が掛かってきたらどうするんだ。」

恰好つかねえだろう」

実際そういうことがよくある。そんなときは同じ商売をしている友人の朴政道に連絡をとつて、空いている女の子を回してもらうことにしている。お互いに都合をつけ合っているのだ。遅刻のたびに時間厳守をいい聞かせるが、彼女たちはいつこうに守ろうとしない。

「だって今日は学校だったのよ」

トモコとルリはソファに座つて脚を投げ出し、菓子を嚙りながら、少女マンガに熱中しはじめるありさまだった。二人はある専門学校に通学していることもあつて、行動をきびしく規制すると辞められるおそれがあつた。一人の女を補うにはかなりの金がかかる。仲介人にリベートを払い、たいていの場合、数十万円の前借に応じなければならぬ。それも一年間勤めれば帳消しという条件である。この世界の女たちは、ほとんどが金にまつわる複雑な事情を背負い込んでいる。そしてときとき、突然行方不明になるのだ。そのときは、その筋の極道に失踪した女の搜索を依頼して捕えてきてもらうことになるが、極道たちに支払う手数料を考えれば採算に合わない。だが、見せしめのために、草の根をわけてでも探し出すのがこの世界の掟であった。

約二時間後にキクがもどってきた。彼女はさつそくバッグから三万円を取り出し、一万円を哲博に納金した。彼女たちと哲博との割合は二対一である。この商売はいつどうなるかわからないので、あと腐れのないように即決清算が相互にもっとも納得のいく方法だった。ただ消費

癖のあるケイは、もらった金をその日のうちに使つてしまい、いつも哲博から前借をしている。おれは女に甘すぎると思いながら、ケイに泣きつかれるとつい前借を許してしまう。それがいまでは百万単位にまで膨らんでいる。前借がかさみ、返済の目処めどが困難になると、かえつて仕事を休み、ますます返済できなくなつて姿をくらます危険がある。ケイはその分岐点にきている。残された方法は一つしかない。ソーブランドに身売りすることだ。身売りの女は組関係のものに監視され、自由を奪われる。ケイのような性格の女は、ソーブランドの世界で生き抜くのはきわめて難しい。おそらく自堕落な生活が続けて身をすりへらし、ぼろ雑巾のようになって見捨てられるだろう。それを考えると、哲博は躊躇ちゅうちよした。その点、朴政道は割り切つていた。政道は、むしろ女たちに前借させて拘束し、借金の返済が不可能な女を容赦なくソーブランドに売り飛ばした。売り飛ばすとき、彼は借金とマージンを抜け目なく取つてゐる。ああでなくっちゃ、この世界では生きていけない。哲博は政道と比較しながら、優柔不断な自分を反省してゐた。

ケイはまだ二十歳だった。十六歳のとき福島から家出して新宿の深夜喫茶で暴走族の少年と知り合い、シンナーを吸つてラリつてゐた。シンナー代欲しさに道行く中高年の男にいい寄つて体売るのを覚えた。それほど難しいことではなかった。声を掛ければたいいの男は誘ひに乗つて、一時間ほどつき合つた代償に大金をくれた。一時間だけ目を閉じて男の好きにさせればよかった。金を得るのが、これほど簡単だとは思わなかった。その金でシンナーを吸ひ、

友達と散財した。そして金があるときは遊び、金がなくなると体を売っていた。

ケイの場合は家出少女の典型だったが、哲博はここにいる彼女たちの前歴について、あまり詳しいことは知らない。彼女たちは過去を語りたがらないし、哲博も彼女たちの前歴や過去に興味はなかった。二十歳前後でこの世界に飛び込んでくる彼女たちは、それぞれに複雑な過去を引きずっている。けれども彼女たちの表情に暗い影はない。笑ったときや涙ぐんでいるときの顔にまだあどけなさを残しているが、彼女たちのしたたかさは何事にもものおじしいことだった。

そして善悪の判断は彼女たちの損得勘定によつてきまる。損か得か、これが判断基準のすべてである。だからちよつとした行為、たとえば食器洗いや掃除を言いつけると、彼女たちは「どうして、わたしが掃除しなきゃいけないの」といやがる。彼女たちは自主的に自分たちの食べた食器を洗ったり、ちらかしたゴミを掃除しようとはしない。哲博が命令して無理矢理やらせると、彼女たちは何か非常に損をしたような気持ちになるのだった。

長年一人暮らしをしてきた彼女たちは、自分以外の人間について考えようとはしない。それは倫理観が後退しているためでもなければ、思いやりがないからでもない。むしろ彼女たちは優しいし、人一倍傷つきやすい。ただ彼女たちは自分のことしか考えないし、自分以外の人間のことを考えられなくなっているのだ。

キクもルリも出勤してくるときは必ず果物や菓子や缶ジュースを買ってくるが、一個しか買

ってこない。自分一人だけ食べたり飲んだりする分を買ってくるのだ。それが長い一人暮らしの習性だった。他人と分かち合おうという気持より、自己防衛本能が先行する。いわば他人と分かち合うということが、どういふことなのかを知らなかった。

まだ宵の口だが暇だった。最近はこの業界も競争が激しく、特にフィリピンや台湾からやってきた女性に客を奪われている。フィリピン女性専用のスナックでは、飲み代とセックスがセットになっていて、三万円あれば充分だった。暇をもてあましてトランプ遊びに興じている彼女たちを眺めながら、このままではじり貧状態になると哲博は考え込んでいた。それにしてもトランプ遊びではしゃいでいる彼女たちは無邪気といえは無邪気だが、一体何を考えているのかよくわからなかった。

「おまえたちは気楽でいいよな。何を考えてんだか、よくわかんないよ」

皮肉のつもりではなく、彼女たちのとらえどころのない無関心さが、哲博の空虚な気分をいっそういらだたせるのだった。

「何も考えてないよ。考えることなんか何もないよ、何を考えるのさ」

アケミがスピードの8を捨てて言った。

「何か悩みくらいあるだろう」

「悩みはいくらでもあるわよ。でも、悩んだってしょうがないじゃん。疲れるだけだよ。今日のマスターはオジサンみたい」

某アイドル歌手に似ているルリが、アイスクリームを舐めながら、哲博を見て微笑んだ。屈託のない愛らしい笑顔だった。

「おれがオジサンみたいだって、参ったな」

「そうだよ。近ごろのマスターはあたしたちに説教するからね」

トモコが皮肉をこめて言う。

「おれがいつ、おまえたちに説教した。おれは仕事のことでおまえたちに注意してんだよ」

「それがよけいなお世話なのよ」

アケミのかすれたハスキーな声が妙にからんできく。

「そうかい、そうかい。じゃあ、これからは何も言わないよ。おまえたちの好きにしろ。だがな、あとで泣きを見るようなことだけはするなよ。おまえたちの尻拭きはごめんだからな」

「とかなんとかいつちやって、マスターは面倒見がいいんだから。だからあたしたちはここにいるんじゃない。ねえ、そうでしょ」

ルリがみんなの合意をとりつけるように言つて、含み笑いをした。

哲博は内心おれも足元を見すかされたもんだと思ひながら、ドライな彼女たちが本当は心配でなかった。

彼女たちとつき合ってきたこの一年の間に、何人かの女たちが見る影もなく落ちぶれていく姿を見ている。体を売ることとは結局のところ心を蝕んでいくことであつた。彼女たちがいかに